

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。

隣家の住民を私が意識するようになったのは、東京に来て何年目ぐらいのころだったのか。秋が深くなったある日、その家の主人らしい小柄な和服姿の老人が、手入れの行きとどいた庭にひとりぼつんと立って空を見上げているのが、二階の窓から、私の目にとまった。

小柄でどこか気むずかしそうなその老人が原石鼎はらせきていという、かなり名の知れた俳人だと教えてくれたのは、父だった。

「隣の主人は、ホトトギス派で名のおった俳人らしいぞ」

ある日、夕食のときに、父がいった。父が近所の人のうわさをするのは、めずらしかった。

「おまえたち、見たことあるか」

私も妹も、首をふった。

「いいえ」

人づきあいの苦手な母は、隣人がだれだろうと、いっこう興味をなさそうだった。

「気むずかしそうなおじいさんだって、ねえやがいました」

食卓のうわさは、それだけで終わったのだろうか。石鼎は当時すでに病身だったはずだが、それに類するような話をその晩、父の口から聞いたような気がする。

隣人が名の知れた俳人だと父に教えられても、当時の私や妹には、それがどういうことを意味するのか、俳人とはどういう人たちなのか、皆目わからなかったから、そのことに対する感想も皆無と行ってよかった。

原石鼎は、明治十九年(一八八六)に島根県に生まれている。明治十九年というと、谷崎潤一郎と同年だ。お父さんが医師だったことから医学の道を志したらしいのだが、試験に失敗して、医者になるのをあきらめ、上京して虚子の門に入った。医師志望からいきなり俳人というのはずいぶん極端に聞こえるが、他の職についてうまくいかなかったり、俳句に専念したかったり、

りかえしたあと、とにかくそうなららしい。小島信夫によると、石鼎にとっての虚子は気まぐれで厳しい先生だったようで、師弟のあいだにはしばしば波風が立ったいっぽう、当時の「ホトトギス」にとって、石鼎は将来を嘱望される、いわば^⑦気鋭の新入人だったらしい。

やがて石鼎は、ゆるくて長くくだり坂のような晩年をたどる。五十を過ぎるころから死ぬまで、彼は、若いころに感染した梅毒と神経衰弱になやまされたあげく、病院生活をなんどもくりかえしている。そして、昭和十六年には、神奈川県二宮に隠棲し、戦後、二十六年(一九五一)に他界している。私が新制大学を卒業した年だ。

建て増したせいで、敷地いっぱいを厚ぼったく占めた二階家の私たちの家にくらべて、隣家は、東南にむかってカギ型にひらいた瀟洒な平屋だった。小島信夫によると、石鼎は、この家を「並大抵ではない八千七百円という金額で」買い取ったとある。千円ぐらいいかなり立派な住宅が建つ時代だったから、この値段は異常に思える。間口から私が推測したところでは、三百平米あるかないかの土地でしかないのだから。

その家の、どこか芝居の花道を思わせる、しゃれたつくりの縁側は、秋のお月見が似合いそうで、^①手水鉢のわきには刈萱が繁り、季節には秋海棠が、ぽつと頬をあからめた女の子を思わせる花をつけるといった、風情のある庭だった。私をふくめて三人の小さい子、そして友人たちを連れた大学生の叔父たちがほとんどひっきりなしに出入りし、ときには短気な父のどなり声のする私たちの家のとりの原邸はいつもひっそりとしていて、近所の子供たちと遊ぶときも、^②小粋な格子戸のついたその家のまえを通るときだけは、ちょっと声をひそめるのだった。

年譜を^③クってみると、私たちの家族が上京して本村町に住むようになったのが一九三八年で、石鼎が夫人と共に龍土町からその家に越してきたのは、その一年か二年まえだった様子。私たちが見ていたのは、五十をいくつか越した石鼎だったはずだ。あのころうちにいた若いねえやたちにも、三十代の半ばだった母にも、たぶん、老人とうつつたろう。子供がいないこと、そして俳人という、あまりぴんとこない職業のせいもあって、その家には遠巻きにするに越したことはない、といった雰囲気があった。

私自身に関していえば、いっぽうには《なにをしているのかよくわからない》職業への、そして「ふつう」から離れた人たちに對する、畏怖があり、もういっぽうには、ある種の憐れみのような感情をいだいていたように思う。それというのも意味はわからないままでも、心のどこかに石鼎の病氣についての、ひそやかな情報が組みこまれていたからではないか。

もし、俳人あるいは歌人を、

A

という言葉から隔離する習慣が日本になくて、この詩形ないし作品をより普遍的、本質

的な批評言語の対象とする習慣がもつとはやくこの国に確立されていたら、石鼎の名は、ずっと早く、私の視界にはいついたはずと思う。発句を連詩の手法から切り離してしまった子規や彼の弟子たちは、

B

化したこの詩形が、やがて「職業」詩

人たちの手に落ち、子規自身が見下した江戸末期の俳諧師とおなじように、詩と権威を結びつけることになるのを想像したのだろうか。

石鼎がつまらない詩人だったというのではない。『花影』と題された句集には、詩人の孤独を自然に託して表現した、いい句がいくつもある。虚子の弟子らしい、絵画性を重んじた新鮮な作風が、読者を存在の深みにさそう。

山の色釣り上げし鮎に動くかな

高々と蝶こゆる谷の深さかな

梟淋し人の如くに瞑るとき

非日常の言語としての詩が、私の意識にのぼるようになったのは、小学校五、六年生のころだった。(1)夏休みに父の蔵書にあった薄田泣菫や土井晩翠、北原白秋などを読んだのが、きっかけだったように思う。(2)ひとつには、小説を読む、とくに私の家では、女の子が小説を読みふけることに、目に見えない抑制のようなものがおとなの側から働いて、しぜん、おおっぴらに読める詩のほうに私は傾いて行った。すでにダダも未来派も試みられていた一九三〇年代に、上田敏や晩翠を読んでいた私は、ずいぶん時代おくれだったにはちがいない。でも、異次元の言語でツムがれる透徹した世界を、詩のなかに認識できたことは、私にとって、おおげさにいえば、やはり人生の曲がり角のひとつだったにはちがいない。(3)学校がいやで、友人たちが信頼できなかったから、この発見は、ふと見上げた空に飛行機雲を見たときのように、おおきく気持ちをひろげてくれた。

世界戦争になって、痛いほど詩が欲しくなる日々と、詩などなくても生きられそうに思う日々が交互にあった。そして、すべてが終わって、本が自由に読めるようになったのは、もう自分に詩を書くというような日が来るのをすっかりあきらめたあとだった。戦争が小さいときからずっと自分たちの周囲にあったので、いつのころからか、将来の計画を真剣にたてないのがくせになつたまま、私は十六歳になつていた。

怪しい鬼たちの行列のように、宮沢賢治、中原中也、そして立原道造の詩が私のまえを横切つて行った。(4) そのひとりひとりに、方法論をもたないまま、私は、どっぷりとはまりこんでは、道草をくつた。

そのころの自分に、案内役といえる人物がいたとすれば、それは、専門学校時代から大学を通して、勉強ぎらいの私たちに手こずりながら、どうにかしてアメリカ文学の醍醐味をつたえようと苦心していたK先生だったろう。じつさいは文学作品のテキストを、一語ずつ日本語に訳して、翻訳の技術を習得するはずの授業なのに、K先生は、専門のアメリカ文学とはなんの関係もない、賢治や道造の詩集を家からもつてきて、私たちに一篇ずつ、読んでくれた。(5) もう小学生のときのように、詩人になりたいなど、とてもはずかしくて他人にはいえない年頃になつていたのが半分、それでいて、自分は詩が好きだと悩ましい顔をしておおっぴらに触れまわる友人はなにやらうとましいのが半分で、だれにも本心を打ち明けられずに、宙ぶらりんだ私にとって、週一回のK先生の授業は待ち遠しかった。

いわば同時代の日本の詩人たちとおなじほど大切に思えたのが、永井荷風や堀口大学の訳詩集だった。やがて、それらに英語の詩が加わり、つぎにフランス語の詩が、そして、ずっとあとには、中世から現代にいたるイタリア詩が私を捉えることになる。

むかしのように詩を読まなくなつて、詩を書きたいと、喉が渇くほど思わなくなつて何年も過ぎたある朝、ある新聞のコラムに目がふれて、時間がいつきに逆流した。C が引用されていて、作者の名は原石鼎だった。

お宅のお子さんたちの声が喧しくて、宅がなにかと申しますものですから。小柄な夫人があるとき、そういつてうちに来られたと、ずっとあとになって母から聞いた。だれが応対に出たのだったか。伝記によると、詩人の神経症が急激に悪化しはじめた

のは、私たちがあの家に越していったすこしまえのことだったらしい。詩人はまた、若いときにできたひとり子を病気で亡くしている。私たちの声が彼の神経にさわったのではなかったか。

だが、現在の私がなによりも口惜しく思うのは、隣が詩人の家だったというのに、あまりにも幼くて、それについてひとつの深い想いも持たず、心を潜ませることもなかったことだ。^① いまもかぎりなく尾をひいて、そのころの自分が、はずかしい。

夕月に七月の蝶のぼりけり

新聞にあったその句は、昭和二十五年、石鼎の死の前年の作で、私が渋谷の寄宿舎にいたころだから、時間的には合致しないが、それを読んで、いつも空を仰いでいた小柄な老人の孤独な姿が記憶に戻った。二階の窓からそれを見ている少女だった自分の姿が老人のそれに重なり、ひらひらと夕月の空にのぼっていきそうだった。

(須賀敦子『遠い朝の本たち』より。なお一部を改めた)

注 小島信夫Ⅱ小説家・評論家。著書に『原石鼎』がある。

ダダⅡダダイズムの略。第一次世界大戦中から戦後にかけてヨーロッパ、アメリカに起こった芸術運動。

未来派Ⅱ二十世紀初頭イタリアに起こった芸術運動。

世界戦争Ⅱ第二次世界大戦。

問1 傍線①、②の読み方をひらがなで書け。

問2 傍線③、④のカタカナを漢字に改めよ。

問3 傍線⑦「気鋭」に最も近いと思われる意味のものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 利かん気 2 気骨ある 3 気まぐれ 4 気ぜわしい 5 意気盛ん 6 気難しい

問4 A に入れるのに、最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して、二字で書け。

問5

B

に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 固辞 2 故事 3 誇示 4 孤児 5 居士 6 古時

問6

次の一文は、文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か。その番号をマークせよ。

だれも他人が入ってくることでできない、自分だけに確保された場所がみつかったのだから。

問7

傍線①に「いまもかぎりなく尾をひいて、そのころの自分が、はずかしい。」とあるが、それは筆者が、かつて、原石鼎

をどのような人だと思っていたからか。そのことが述べられている一文を、本文中から百五字以内でそのまま抜き出して、初めと終わりの五字を書け。

問8

C

に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 絶句 2 結句 3 挙句 4 連句 5 警句 6 発句

問9

本文の内容に合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 私は青春時代、日本とヨーロッパの詩に魅せられ、そのあと、専門学校で連歌から俳句が独立する過程を研究した。その結果、この文芸が俳壇とか結社とかいう閉鎖的な世界に自足するものになったと認識して、詩に回帰した。
- 2 私たちの隣人であった原石鼎の、俳人という職業や暮らしぶりの不可解さのせいで、その文学との出会いは遅いものとなった。日本とヨーロッパの詩を遍歴したずっとあとで、やっと私は石鼎の句の深さがわかるようになった。
- 3 私たちが東京に来て住んだ本村町の家の隣の瀟洒な和風の家が、高名な俳人の原石鼎の住居だったと知ったのは戦後のことであった。小島信夫氏の『原石鼎』に導かれて彼の人生を知り、その句の存在の深さを初めて理解した。
- 4 私は宮沢賢治・中原中也・立原道造の詩によって、初めて非日常の言語が表現する世界の魅力を知った。それはふと見上げた空に飛行機雲を見た時のように私の気持ちを開放し、以後ずっと詩とともに歩む私の人生を決定した。
- 5 私は今でも、原石鼎という人をいつも空を見上げていた孤独な老人としてしか思い描けない。最近知った「夕月に七月の蝶のぼりけり」という作も、かつて隣家の庭で空を見上げていた老人を思い出させるだけのものではなかった。

問10

6 私たちの住んでいた家はにぎやかな家で、孤独を友として暮らす隣人には迷惑であったようである。そのような抗議を受けたこともあったようで、今まがりなりにも文章を書いて生きる者として恥ずかしい限りの思い出である。

(Ⅰ) 中原中也と、(Ⅱ) 立原道造の詩集を、次のなかからそれぞれ一つ選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | | | | |
|---|-----------------------------|---|-------|---|-----|---|------|
| 1 | 萱草 <small>わすれぐさ</small> に寄す | 2 | 邪宗門 | 3 | 白羊宮 | 4 | 春と修羅 |
| 5 | 珊瑚集 | 6 | 月下の一群 | 7 | 海潮音 | 8 | 山羊の歌 |

二 次の文章を読んで、問いに答えよ。

多言語社会においては、それぞれの民族が互いの言語を尊重する「多言語主義」が、重要なキーワードとなると思われる。しかし、多言語主義を實踐することは、簡単なことではない。多言語社会とは、言語だけではなく、宗教や文化も異なる集団から構成される社会であり、さまざまな要素が絡んでいるからである。

さらに、各集団の言語は、等価で並んでいるのではなくて、威信言語として高い地位を占める言語から、私的な分野でしか使われないマイノリティの言語まで、階層的に存在することが多い。いわゆる二言語併用や三言語併用、あるいは多言語併用が見られる。この社会では、高い地位の言語の話し手は、自分の言語しか話せないが、低い地位の言語の話し手は、Aから、複数の言語の話し手となることが多い。

このような複雑な言語社会の中では、「互いに理解しあって共存共生してゆこう」という標語だけで、簡単に理想的な多言語社会が実現することはありえない。それを可能にするのは、絶え間ない緊張の連続をとまなう、共生への努力であろう。そのためには、深い洞察に富み、将来を見据えた言語政策が必要になってくる。

もつとも、どのような言語政策が具体的に望ましいか、と問われても、即座に答えられるようなものではない。歴史を振り返れば、いろいろな言語政策があった。移民をできるだけ早く自国の文化に同化させるための言語政策があったし、植民地を有効支配するための言語政策があったし、独立したばかりの新興国ならば、^⑦遠心力の働きがちな各民族をまとめ上げるための言語政策があった。要は、目的に応じて、さまざまな言語政策があったのである。

言語政策は、その国の実情にそって決められなければならない。国により、何を優先させるかという点で異なっているからである。ある国の言語政策が他国にそのまま当てはまることはありえない。多民族が寄せ集まって独立した新興国や、共通語を樹立しようと苦闘している多言語国家に、先進国の多言語主義に基づいた言語政策を、そのまま適用することは不可能であろう。

さて、これからの日本に最も必要な言語政策は何か、と考えてみよう。それは、間近に迫った多言語社会に対応できる言語政策ということになる。その社会における各言語の望ましいあり方を探り、その準備を始めることになるだろう。その場合、キ

「ワードとなるのは、「言語の平等」である。日本という多言語社会が円滑に成立してゆくためには、「各言語間の平等を追求する政策」が是非とも必要である。

ここで、「平等」ということの意味を考えてみよう。異なる民族が共存してゆく場合、往々にして起りがちな摩擦を取り除く方法として、最も有効なことは、互いに納得のできる平等を実現することであろう。それは、各民族間の経済格差をなくしてゆくことや、政治的に平等な権利を保障することである。そして、付け加えて言うならば、言語に関しても、各言語話者は互いに平等になれるような政策を追求すべきである。たしかに、太平洋の孤島に住む千人そこそこの少数民族の言語と大国の公用語を同列に並べることはできないかもしれないが、少なくとも、私たちの努力目標は、そこに合わせなければならぬ。

各民族が **B** してゆく上で、経済的な平等、政治的な平等だけで十分ではないか、何もないへんなコストをかけて、話者の少ない民族の言語を維持してゆく必要はあるだろうか、という疑問が生じるかもしれない。そのことを考えてみよう。

人間は異文化からの訪問者（ここでは異人と称してみよう）と出会ったら、非理性的な反応を示すものである。今までの自分の文化・世界観で把握できない相手、得体の知れない相手であるゆえに、パニック状態になるとも考えられる。どのように対応していいか分からなくなり、**C** してしまうのである。それゆえに、対応は極端から極端へと走りがちになる。異人に対して、ある時は手厚くもてなし、あるときは激しい排斥を示すのである。しかし両方とも同じ根から生まれた行動なのである。文化人類学の用語を使うならば、異人歓待と異人虐待は同じ現象の裏と表という関係になる。英語の *host* (原義は「客」) から、*hostile* (敵意のある) と *hospitable* (手厚くもてなす) という二つの派生語が生じてきたが、英語圏でも同じ事情であったと思われる。

異文化の人間同士をつなぐために、ほほえみ、握手、あるいは食事を共にすることは有効であろう。しかし、やはり言葉に勝るものはないであろう。異文化の人間同士は言葉を介してのみ、二つの文化の間に横たわる深淵を越えて、相手の世界を知ることができるのである。言葉を通してのみ、相手が得体の知れない不気味な存在ではなくて、自分と同じように喜び悲しむ人間であることを理解するのである。

異文化理解の上では、双方向のメッセージのやりとりが必要である。一方通行のメッセージならば、何もメッセージを受けな

い方は、相手を得体の知れない存在であると考えてしまう危険性がある。双方向のメッセージが大切であるが、それを最も効果的にするのは互いに相手の言語を知りあうことである。相手の言語を互いに知りあうことで、異文化間の深淵を越えてつながる橋が、双方向から補強され、めったなことでは崩れない強固な橋になっていくのである。

(河原俊昭『世界の言語政策』より。なお一部を改めた)

問1

A

に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 生計の利便性
- 2 学業の計画性
- 3 職業の重要性
- 4 生活の必要性
- 5 進路の実現性
- 6 労働の有効性

問2

B

に入れるのに、最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して、漢字四字で書け。

問3

C

に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 高を括って
- 2 途方に暮れて
- 3 得心がいつて
- 4 長いものに巻かれて
- 5 溜飲を下げて
- 6 お茶を濁して

問4

傍線アの「遠心力の働きがちな」の説明として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 独立したばかりの新興国では、国の歴史が浅いために、他民族の文化に対して相互理解がもてないままであること。
- 2 独立したばかりの新興国では、経済基盤が脆弱なことから、現金を得ようとして外国に出稼ぎに行く者が多いこと。
- 3 独立したばかりの新興国では、国作りに対する理念を民族間で共有できず、意見や要求がなかなか一致しないこと。
- 4 独立したばかりの新興国では、各民族のリーダーよりも、国を統一した新しい指導者の意見に従いがちであること。
- 5 独立したばかりの新興国では、国全体の利益や結束を優先して考えるので、各民族内のまとまりが薄れていくこと。

問5

本文の内容と合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 多言語社会においては、移民に対する同化政策が重要である。同化政策を推進するには、移民が一日も早く移住先の言

語や文化を習得できるよう、国は教育の平等を追求する施策を整備するべきである。

2 英語圏では「異人」に対して歓待と虐待の対応をとってきた。このような両極端の対応に陥らないためには、言語を媒介としない、共同型の活動を伴う異文化接触場面を設定することが最も有効である。

3 多言語社会においては、各民族が互いに意思疎通を図ることが必要である。互いの意思を通じ合わせるには、国は共通語を導入する言語政策をとり、新しい文化の創造を目指していかなくてはならない。

4 異なる民族が集まって一つの国家を形成するには、民族間の経済格差を解消することが前提となる。格差解消のために、国は言語政策よりも生活基盤の整備や産業の振興を優先した政策をとる必要がある。

5 多言語社会においては、各民族の持つ言語の平等性を追求しなくてはならない。各言語話者が平等になるためには、互いの言語を知りあうことで、双方向のメッセージをやりとりすることが重要である。

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

(比叡山横川に住む僧都を訪ねた薫は、思い人である浮舟が入水した後のあらましを聞くこととなった。)

忍びやかに、薫「いと浮きたる心地もしはべる、また、尋ねきこえむにつけては、いかなりけることにか、と心得ず思されぬべきに、かたがた憚^{はばか}られはべれど、かの山里に、知るべき人の隠^{ひそ}ろへてはべるやうに聞きはべりしを。確かにてこそは、いかなるさまにて、なども漏らしきこえぬ、など思ひたまふるほどに、御弟子になりて、忌むことなど授けたまひてけり、と聞きはべるは、まことか。まだ年も若く、親などもありし人なれば、ここに失ひたるやうに、かごとかくる人なむはべるを」などのたまふ。

僧都、「さればよ。ただ人と見えざりし人のさまぞかし。かくまでのたまふは、軽々しくは思されざりける人にこそあめれ」と思ふに、「法師といひながら、心もなく、たちまちに容貌^{かたち}をやつしてけること」と胸つぶれて、いらへきこえむやう思ひまはさる。

「確かに聞きたまへるにこそあめれ。かばかり心得たまひて、うかがひ尋ねたまはむに、隠れあるべきことにもあらず。なかなかあらがひ隠^{ひそ}さむにあいなかるべし」などとばかり思ひ得て、「いかなることにかはべりけむ。この月ごろ、うちうちにあやしみ思ひたまふる人の御ことにや」とて、「かしこにはべる尼どもの、初瀬に願はべりて、詣でて帰りける道に、宇治の院といふ所に留まりてはべりけるに、母の尼の労^{ろう}気にはかに起こりて、いたくなむわづらふと告げに、人の参^まりて来たりしかば、まかり向かひたりしに、まづあやしきことなむ」とささめきて、「親の死にかへるをばさしおきて、もてあつかひ嘆きてなむはべりし。この人も、亡くなりたまへるさまながら、さすがに息は通ひておはしければ、弟子ばらの中に験ある者どもを呼び寄せつつ、かはりがりに加持せさせなどなむしはべりける。なにがしは、惜しむべき齢ならねど、母の旅の空にて病重きを助けて、念仏をも心乱れずせさせむと、仏を念じたてまつり思ひたまへしほどに、その人のありさま、くはしくも見たまへずなむはべりし。ことの心推し量り思ひたまふるに、天狗、木霊^{こだま}などやうのもの、あざむき率てたてまつりたりけるにや、となむうけたまはりし。助け京に率てたてまつりて後も、三月ばかりは亡き人にてなむものしたまひけるを、なにがしが妹、故衛門督^{せもんかみ}の北の方にてはべりしが、尼になりてはべるなむ、一人持ちてはべりし女子を失ひて後、月日は多く隔てはべりしかど、悲しびたへず嘆き思ひたま

へはべるに、同じ年のほどと見ゆる人の、かく容貌いとうるはしくきよらなるを見出でたてまつりて、観音の賜へると喜び思ひて、この人いたづらになしたてまつらじと、まどひ焦られて、泣く泣くいみじきことどもを申されしかば、後になむ、かの坂本にみづから下りはべりて、護身など仕まつりしに、やうやう生き出でて人となりたまへりけれど、『なほこの領じたりけるもの、身に離れぬ心地なむする。この悪しきものの妨げを逃れて、後の世を思はむ』など、悲しげにのたまふことどものはべりしかば、法師にては、勧めも申しつべきことにこそはとて、まことに出家せしめたてまつりてしにはべり。さらに、しろしめすべきこととは、いかでかそらにさとりはべらむ。めづらしきことのみあるを、世語りにもしはべりぬべかりしかど、聞こえありて、わづらはしかるべきことにもこそと、この老人どもとかく申して、この月ごろ、音なくてはべりつるになむ」と申したまふ。

(『源氏物語』より)

問1 傍線⑦の「かごとかくる人なむはべる」、⑧の「あらがひ隠さむにあいなるべし」を、それぞれ現代語訳せよ。

問2 傍線①、⑥の「人」のなかで、他とは異なる人物を指しているものを一つ選び、その番号をマークせよ。

問3 傍線①の「いらへきこえむやう思ひまはさる」の理由として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 薫の希望とはいえ浮舟が出家するのを阻止できなかったから。
- 2 妹尼の遺言にも関わらず浮舟の居所を話すはめになったから。
- 3 薫が慕う浮舟を何の心配りもせずに出家させてしまったから。
- 4 母の病気の看病で浮舟のそばから離れることが多かったから。
- 5 薫と非常に親密になったのに嘘をつかなければならないから。

問4 傍線㊦の「くはしくも見たまへずなむはべりし」の理由として、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 高貴な女性と気付いたから。
- 2 介抱してすぐ母の看病に出かけたから。
- 3 仏を一心に念じていたから。
- 4 弟子たちに看病を任せきっていたから。
- 5 天狗や木霊が恐かったから。

問5 傍線㊧の「ことの心」とは何か。最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 浮舟を助けたことへの非難。
- 2 浮舟と関わった事情。
- 3 念仏していた本当の目的。
- 4 弟子たちに祈禱させた理由。
- 5 母が病気になった訳。

問6 傍線㊨の「いみじきことども」とは何か。最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 娘の成仏を願う母としての真心。
- 2 観音に祈願したいという信仰心。
- 3 浮舟を世間の非難から守る決意。
- 4 浮舟を救ってほしいという願望。
- 5 浮舟を養女にしたいという希望。

問7 傍線㊩の「しろしめすべきこと」とは、誰と誰の関係を言っているか。最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 薫と僧都
- 2 薫と浮舟
- 3 僧都と浮舟
- 4 僧都と妹尼
- 5 妹尼と浮舟
- 6 浮舟と世間の人々

問8

本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 薫は僧都の弟子になるように思わせて、浮舟のいる場所を探ることにした。
- 2 僧都は浮舟と事前に打ち合わせした通りに、薫の追及を逃れることにした。
- 3 宇治院滞在中の僧都は、入水した浮舟のことを聞きつけて懸命に介抱した。
- 4 僧都が浮舟を庇護することにしたのは、妹尼の強い希望によるものだった。
- 5 浮舟は僧都の法力で回復したものの、常に悲しげに來世ばかり考えていた。
- 6 僧都は自分の意見に反し浮舟が出家したため、世間体が悪いと考えていた。

四 次の文章を読んで、問いに答えよ(設問の都合上、訓点を省略した部分がある)。

韓魏公在_二大名日、有_三人送_二玉盞二隻云、「耕者入_二壞塚而
 得_〇表裏無_二纖瑕世宝也。」公以_二百金答_レ之、尤_レ為_二宝玩每_二開_レ
 宴召_レ客特_ニ設_二一卓以_二錦衣置_二玉盞其上_〇一日召_二漕使_且
 將_二用_レ之酌_〇勸_〇俄為_二一吏誤_レ觸_レ倒盞俱_〇碎坐客皆愕然吏
 且_二伏_レ地待_レ罪公神色不動謂_二坐客曰、「凡物之成毀有_二時
 数存_二焉。」顧_レ吏曰、「汝誤_レ也、非_レ故也。何罪之有。」客皆嘆_二服_ス
 公之寛厚。公帥_二定武時嘗_レ夜作_レ書令_二一兵持_レ燭於_レ傍兵
 他顧_レ燭燃_二公鬚公遽_レ以_レ袖扞_レ之而作_レ書如_レ故少頃間視_レ
 則已易_二其人矣。公恐_二吏答_レ之亟呼_レ視之曰、「勿_レ較、渠已解_レ

持^{セリト}燭^ラ矣。軍中咸^{みな}服^ス其^ノ A ^ニ

(『青瑣高議』)

注 韓魏公^ニ人名。北宋時代の政治家・韓琦のこと。大名^ニ地名。

玉盞二隻^ニ二個の玉製のさかずき。

織瑕^ニ小さな傷。

漕使^ニ官名。

成毀^ニ物が出来上がることとこわれること。

時数^ニきまつた時と運命。

帥定武^ニ定武は地名。帥は軍事や民事を司る長官。

他顧^ニよそ見をすること。

較^ニ罪を調べ責めること。

問1 傍線①の「尤」、②の「俱」の読み方を、送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

問2 傍線③の「汝誤也、非故也。何罪之有。」の意味として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その

番号をマークせよ。

- 1 君のあやまちは、古くからのものではない。いったい何の罪があるか。
- 2 君のあやまちは、わざとやったのではない。いったい何の罪があるか。
- 3 君のあやまちは、もとおりににはできない。だからなんと罪深いことか。
- 4 君のあやまちは、以前のものと変わらない。だからなんと罪深いことか。
- 5 君のあやまちは、訳あつてのことであろう。でも罪が無いわけではない。
- 6 君のあやまちは、防ぐことができなかつた。でも罪が無いわけではない。

問3 傍線④の「令一兵持燭於傍」の書き下し文として、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号

をマークせよ。

- 1 令して一兵より燭を持して傍せるに
- 2 令して一兵に傍に於いて燭を持するに
- 3 令して一兵の燭を持して傍に於いてするに
- 4 一兵をして燭を傍に持せしむるに
- 5 一兵をして持せしめて傍に燭するに
- 6 一兵をして持し燭せしむるに傍に於いてするに

問4

A

に入れるのに、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 遠謀
- 2 炯眼けいがん
- 3 孝行
- 4 敏腕
- 5 度量
- 6 胆力たんりよく